

「ほんと、かわいい。俺の・・・」

混乱する私を見下ろし、彼は狂気に満ちた笑みでそう呟いた。

「や、めて、義兄さ、ま」

何とか絞り出した声。

「やめないよ」

私を見下ろす銀色の瞳。

「ずっと、こうしたかった」

今までの幸せが壊れた音がきこえた。

「あっ、あっ、」

身体に力が入らない私の抵抗など意味をなさない。彼の手が、指が私を蹂躪する。舌が溶けてしまうんじゃないかと思うほどの口づけは私の意識を曖昧にさせた。そして、彼の大きな手が私の胸をまさぐった。

「やっ、やだあ」

優しく、でも力強く胸を揉まれ、初めての感覚に戸惑いと羞恥が止まらない。

「はあ・・・かわいいよ・・・ここはどうかな？」

彼の指が胸の頂をカリとつついた。

「あ！ああっ！！」

びん！と体がはねた。

（なに、これ・・・）

初めての快楽に混乱する私の顔を見て、彼は更に恍惚な表情を浮

かべた。そしてそのまま私の胸に顔を埋めたのだ。

「あっ！！やあ、ん！！」

乳首を彼の熱い舌が這う。身体がびくびくと痙攣した。

「やめて、や、もう、義兄さま」

そう懇願する私の耳元で、彼は低く言った。

「義兄さま、じゃない。シリウスと呼んで」

何を言われているのか。理解するには刺激が強すぎる。

そして彼の指は私の大事な所を、ゆっくりと触った。

「あっ、そこは、だめ・・・あああああ！！」

すでにぐちよぐちよに湿っていたそこを触れられた瞬間、全身に

電流が走った。

「こんなに濡れてる。かわいい。もっともっと気持ちよくなるからね」

彼の言葉なんて耳に入らないくらいの快感が私を襲う。

「やめ、やめて・・・あああああ！！！！！！」

無骨な指が私の陰核を優しくつまんだ時、信じられないぐらいの快楽に目の前が真っ白になった。

「上手にいったね、えらいよ」

下腹部をビクンビクンと揺らし、快樂の余韻が残る私に彼は嬉しそうに言った。そして今度は指を、中に・・・